



Title	母子の共生を可能にするおんぶ育児
Author(s)	神谷, 千織
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 437-440
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60727">https://doi.org/10.18910/60727</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 母子の共生を可能にする おんぶ育児

神谷 千織

大阪大学大学院医学系研究科博士前期課程

あなたが一番初めに「共生」した相手は誰だろう。きっと誰もが、生まれる前に母親の胎内で母親と共生していたのではないだろうか。それは一種の生物学的共生（symbiosis）であり、私たちの考える共生とは違うという意見もあるだろうが、胎内での共生は母子間に相互作用（interaction）があることが明らかになっており、それは生物学的共生よりも我々の考える共生に近い。それは一般的には「母子の絆」と呼ぶだろう。

途上国は高い出生率を誇り、独自の慣習が残っている。その中には私たちが見落としている「母子の絆」が潜んでいることがある。その一つに「おんぶ育児」が挙げられるだろう。我が国では、おんぶ育児を目にすることは減ったが、途上国では多くの母親が、今でも、首がすわっていない新生児をも大きな布一枚で包み、一日家事や仕事を行う。偶然にも私は2016年2月に南米ボリビアのラパス、同年11月に南部アフリカのザンビアをそれぞれ訪れた際、おんぶ育児を実際に見る機会があった。

まずボリビアでの体験から記そう。実質上の首都であるラパスの人口は約250万人（2013年）。ケチュア族、アイマラ族などの先住民が半数以上を占める。近年では燃料資源の開発に伴う経済成長によって注目を浴びているが、母子保健では周産期死亡や妊婦死亡率がなお高い。

ラパスに滞在中、街を歩いた。先住民の女性たちがカラフルな正方形の織布、アワヨをリュック代わりに背中に背負っているのが昼夜問わず、すぐ目についた。背中には荷物ではなく、子どもを入れている。日本では夜遅くに子どもを外に連れ出すのは良くないことと考えられているが、ボリビアでは夜に子どもを外に出すことよりも、母親と子どもが離れることの方が不自然であるようだ。

少しして気付いたのは泣いている子どもが少ないという点である。おんぶによる効果なのだろうか。また、泣いてもすぐにおんぶされて泣き止んでいた。おんぶされている子どもは基本的に乳幼児が多いが、中には学童期に近い子どもがおんぶされているケースもまれにあった。

学童期の子どもたちが街の広場で遊んでおり、その横で母親たちが井戸端会議をしていた。しばらく見ていると、そのうち子どもたちが喧嘩して大きな声が聞こえ、子どもの一人が泣き出した。すると近くにいた母親が子どもをなだめて、それでも泣き止まないでいるとおもむろにおんぶをした。今まで見た中で一番大きな子どものおんぶだった。しかし、アワヨは大きな布なので、足だけはみ出してその子どもはすっぽりと覆われてしまった。するとその子は泣き止んだ様子で静かになった。一瞬の対応であった。そこは街の広場であり、子どもが泣いても誰かに迷惑を掛けるような場ではない。

しかし母親はすぐに子どもをおんぶした。日本に見られるように、他人に迷惑を掛けるから泣き止ませるのではなく、単純に子どもを泣き止ませるための行為であった。そして子どもをおんぶするのが



写真1 ボリビアの市場で買い物をする母子

早い。

日本で販売されている「抱っこ紐」は子どもの落下防止により、上下左右に留め具があり、子どもを抱くのに時間がかかる。ましてや首のすわっていない子どもを抱くのは難しく、簡単にはできない。一方、アワヨは布一枚なので留め具もなく、すぐに抱くことができる手軽な育児用品である。安全性については不明であるが、実際、露天商の女性に荷物を背負うところを見せてもらおうと、背負い終わるまで、わずか30秒弱だった。更に値段も1000円弱だという。

ザンビアでは、首都ルサカから車で2時間ほど南のカフェエという村を訪ねた。

同国の人口は1,502万人で73の民族が暮らしている。内戦もなく、アフリカの中では比較的平和な国家だが、母子保健はボリボア同様に課題が多く、カフェエの村では妊婦の4割近くが自宅で出産をしている。

ザンビアでもラパス同様におんぶをしながら生活をする母子を多く見かけた。おんぶに使う布はチテンゲという伝統布で、これで荷物を運んだり、スカートとして巻いたり出来る。価格は1500円程度で、市場などどこでも手に入る。

今回はNGOが主催する会合に参加したのだが、新開発の離乳食が会合で配られるとあって、たくさんの母子が参加していた。もちろん、パワーポイントでの発表を行っている会議にチテンゲで子どもをおんぶしながらの参加である。日本の助産学会では会場に数人の赤ちゃんがいるだけでも画期的に思えるが、ザンビアの会場で見た子どもの数は日本とは比べものにならない。大人の話は退屈なのだろう。泣いている子どももいたが誰も気にしていない様子だ。その空間が心地よかった。

おんぶで会場に入ってきた母親たちは椅子にすわる時に子どもをチテンゲごと前にくるりと回して、抱っこに変えてすわっていた。椅子にすわる時は抱っこが適しているため、おんぶ紐は一瞬にして抱っこ紐に変わった。日本に流通している欧米式の抱っこ紐はこう

はいかず、このような便利な使い方を初めて知った。

ボウルビィは母子愛着形成について、特定の愛着対象との持続的・個別的で一貫性のある情愛に満ちた関係が心身の発達に最も重要であることを明らかにした。このことから出生後の母子分離は、人類にとって母子愛着形成のみならず、心身の発達への大きな障害となって立ちはだかった。そこで取り入れられたのはおんぶ紐であった。しかし女性が家庭に入る状況

になると「労働としてのおんぶ」の必要がなく、子どもを床に置きながら自宅での労働(家事)が出来るようになった。

近年では、抱っこが主流になってきている。抱っこは子どもとの対面が可能であることに加えて、ファッション性や欧米企業のマーケティング戦略が背景にあるのだろう。では母子接触は抱っこでも促されるのだろうか。確かに抱っことおんぶでは接触という点では変わりはない。しかし抱っこ紐を用いた抱っこの第一の問題は母親の体への影響である。母子が向かい合って対面するとアイコンタクトが取れる一方で、母親の背骨に負担が生じる。さらに子どもが前にくるので、抱っこをしながらでは労働(家事)を同時に行なうことができない。

現代の日本では先進国ならではの育児のしづらさが生じている。そこには母子愛着形成の薄弱化により母子が共生できず、児童虐待、産後鬱、発達障害などの社会的問題に繋がっていると感じる。経済的には豊かではないが途上国の生活の一部には我々が見落としている質の高いケア、たとえばおんぶ育児などが潜んでいることがあり、それをもう一度見直していくことが重要ではないだろうか。



写真2 ザンビアでNGOのイベントに参加する母子